

上の井手遺跡の調査

— 第143-1次

はじめに

本調査は、飛鳥資料館既存排水ルートの付け替えにともなう事前調査として実施した。調査地は飛鳥資料館北側通用門付近に位置し、調査区は通用門を挟んで東西2箇所（西区・東区）にまたがる。調査面積は37.8㎡、調査期間は、2006年6月26日～7月5日である。

基本層序は上層から青灰色土（造成土）、灰褐色土（水田耕土）、褐灰色土が堆積し、現地表下約0.6mで礫混黄灰色土の地山に達する。遺構は褐灰色土上で検出した。検出面の標高は100.6m前後である。

検出遺構

東区西端で石組暗渠SD4220と東西溝SD4221を検出した。石組暗渠は、調査区内で大きく攪乱を受けているが、調査区断面で確認した。暗渠はまず褐灰色土上から地山まで掘り込み、底石（幅約15cm、深さ約20cm）を据え、両側石（幅約15cm、深さ約20cm）を立て、蓋石（幅約30cm、深さ約5cm）を置く。底石と側石は風化していたが、蓋石は一部残り、いずれも花崗岩を用いる。この他、東西溝SD4221は南肩の一部を検出した。重複関係から石組暗渠SD4220築造以前のものとわかり、埋土から古墳時代の須恵器片が出土した。

出土遺物

SD4221から須恵器片が出土した（図153）。口縁径24.2cmを測る須恵器の中型甕である。中粒の砂粒を若干含む

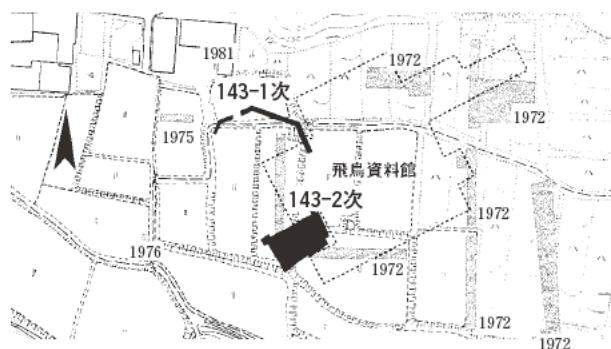


図152 第143-1次調査位置図 1:2000

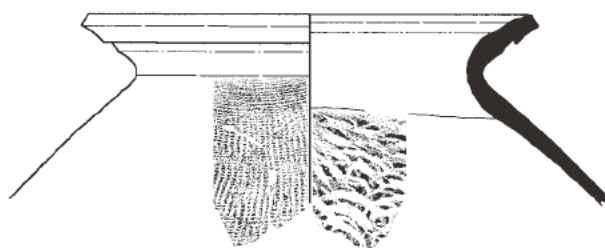


図153 東西溝SD4221出土土器 1:4

胎土を用い、体部はタタキ形成の後、横方向にカキ目調整をおこない、口縁部をナデで仕上げる。体部内面には、粗い同心円状の当具痕が残る。

まとめ

上の井手遺跡では昭和47年度に飛鳥資料館建設に伴う事前調査をおこない、2条の石組暗渠を検出した。北方に位置するものは、東西約8.5m分と東端から南へ延びる約4m分を検出しており、今回確認した石組暗渠SD4220と一連の可能性が高い。ただし、今回の調査では断面での確認に留まったため、今後の周辺の調査が期待される。

（清永洋平・杉山 洋）

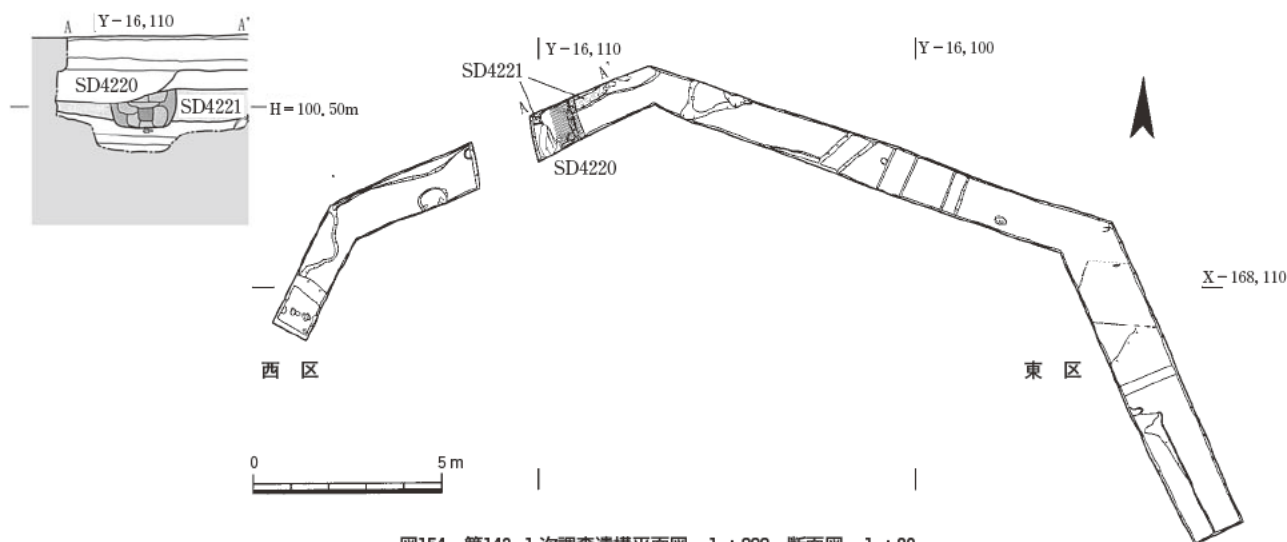


図154 第143-1次調査遺構平面図 1:200・断面図 1:80